

ベトナム山岳地帯の農村で見た農業の姿

林 哲

(伊藤忠飼料(株)研究所 嘱託研究員)

All about SWINE 56, 22-26

筆者は、科学技術振興機構（JST）と国際協力機構（JICA）が共同で開発途上国の研究者と共同で研究を行う SATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）プロジェクトに参画させて頂くことができました。その研究テーマは「ベトナム在来ブタ資源の遺伝子バンクの設立と多様性維持が可能な持続的生産システムの構築」という5か年間のプロジェクトで、2014年にスタートし2020年5月に終了することになっています。この中で、筆者に与えられたテーマは在来豚を飼育している農家の生産性を高めその結果、農家の収入増につなげることで絶滅の危機にある在来豚を保存することにあります。そのプロジェクトの取組については別途機会をいただいて書こうと思います。このプロジェクト活動のフィールドは、ベトナム北部の山岳地域で少数民族が在来の豚を飼育する村々で、これから書こうとする農村や農業の姿は今の日本では見ることのできない、いずれ将来的には消滅するであろう農村風景で大変興味深く感銘を受け考えさせられるものがありましたのでこの場をお借りして書いてみたいと思います。なお、はじめにここで書くベトナムの農村は、筆者が直接プロジェクトに携わった地域で見聞したことを元に書いていますのでベトナム全体の状況を記したものではないこと

をお断りしておきます。

まず初めに、“All about SWINE”にふさわしくベトナムの養豚事情について若干触れておきます。ベトナムの豚飼養頭数は、中国、アメリカ、ブラジル、ドイツについて世界第5位（2014年）であることは案外知られていないことと思います。しかも近年の開発途上国を中心とした世界的な経済成長を受け消費量も増え右肩上がりの状況が続いています。しかし、そのほとんどはいわゆる西洋豚が大半を占め、その増加は西洋豚の増加に依存している状況です。規模の拡大も同時に進行しているようです。一方、ベトナム在来豚はかつてはベトナム全土に50品種ほどいたそうですが、現在では20数品種に減少しています。西洋豚の方が産子数が多い、成長が早いなどの理由から交雑が進むなど徐々に減少していったという状況のようです。したがって、在来豚は山岳地帯の少数民族によって細々と飼育される状況になってきています。経済発展の恩恵は都市部が中心で山岳地帯の少数民族まで及ばないのが現状で、山岳地帯の経済の底上げをしたいというのがベトナム政府の共同プロジェクトの目的の一つでした。対象となった地方政府（ホアビン省）では、その地域の特産品であるオレンジ（カオフォンオレンジ



稲刈りの様子



山間の農家と棚田



ニワトリ、アヒルそしてブタ

ジ：ベトナム航空の機内食にもなった）と同様に在来豚の豚肉を特産品にしたいという目論みもあるようです。ホアビン省は首都ハノイから西北に100 km程に位置し、特にダバック地区は在来豚の多い地域です。ダバック地区はホアビン省の中でも奥地にある山岳地帯で、水田での稲作、サトウキビ、トウモロコシ、キャッサバ、食用カンナ（でんぷんが取れる）、オレンジなどの果樹が栽培されていますが平地は少なく、かなりの傾斜地でもトウモロコシやキャッサバ、棚田でのイネなどが栽培されています。雨が多く、水が豊富なため稲作は山岳地帯でも盛んで棚田が随所に見られます。稲作はベトナム北部では年2回作付のできる二期作が、南部では三期作が行われている主要生産物で、生産量は世界第5位、輸出量は第2位（2008年）です。主要産地は南部のメコンデルタ地帯と北部の紅河デルタ地帯では平地を利用した水田が広がる一方、山間地の棚田の風景は非常に美しく観光名所となっているところもあ

る。イネ、トウモロコシ、キャッサバ、サトウキビなどは山岳地帯でもある程度まとまった作付が行われ、自家消費以外に外部への販売が行われている。バナナ、ライチ、スターフルーツ、竜眼などの果物類も豊富で村々の道端や市場では多く見かけることができます。このような果物は栽培しているというよりは山林などに自然に生えているもの、農家の裏庭で栽培しているもの、などという印象が強い。家畜についても水牛、牛、ヤギ、豚、鶏、アヒル、ガチョウ、ハト、ミツバチなどが飼育されている。ほとんどが飼育しているというより放牧状態で人と共存しているという印象だ。畜舎といえるものはほとんどなく、竹囲いの牛小屋や豚舎はあってもほぼ自由に出入りしている。道路をこれらの家畜がうろうろと自由に歩き回っており、盗まれないのだろうか心配するのは日本人の悪い癖だろうか？日本ではニワトリなどはイタチにやられるがそのような家畜を襲う動物もないようである。スイギュウ、牛、ヤギの



道端での牛の屠殺



庭先での豚の解体



豚と鶏が仲良く

ような反芻家畜はもちろんのこと、ニワトリ、アヒルなどもほぼ放牧状態で人家の周辺の山野を放浪し、野生の昆虫などを含む動植物を採食している様子である。人が与える飼料はほとんどが農作物の副産物バナナの茎、サツマイモの芋づるなどで、スイギュウやウシでは稲刈りの終わった田に放たれている様子はよく見かける。ブタではこの他、いわゆる残飯の類も給与している。各農家では自家製の酒（焼酎？）を作っており、これの発酵かすもよく使われている。このほか、米ぬか、くず米、トウモロコシ、キャッサバは自給して給与しているがこれらは量的には少なく主体は植物の茎葉類である。飼料はほとんど購入することはなく、配合飼料はわずかに雛用などが使われているようだ。量的にはわずかのようである。この山岳地帯で使われているベトナムの配合飼料は、5kg包装で、他の自給飼料と混合して使うサプリメント飼料のため使用量はわずかであると想像される。ただし、どの程度の製造規模があるのかは分からないがタイ資本の飼料メーカーの飼料工場がハノイからホアビン省に行く途中にあり、先進国と同様の畜産が行われていることは国の研究機関や都市部のスーパーなどの生産物を見ることで窺い知ることができ、国全体の畜産としては欧米系の家畜品種に商業的な配合飼料を給与するいわ

ゆる近代畜産が主流なのであろう。

以上のようにこの地域の畜産は基本的に粗放な飼育形態で畜舎は手作りの竹製や木製のものである。豚舎はコンクリート製（木製や竹製ではすぐ壊されてしまう）が増えつつあるものの多くは豚舎からほぼ自由に出入りできる構造となっている。在来豚は粗放的に飼育する方が良いとの考え方が根強く、豚舎があっても隣接する放飼場との間は自由に出入りでき、そこではニワトリやアヒルが共存している。更には山野へ通じていることが多い。飼育規模も小さく家禽を除いては10頭前後以下であり、ほとんどが自家消費である。この山間地域にはと畜場や食肉処理場などの畜産にまつわるインフラはほとんどない状態で、屠殺は庭先で行われている。

一方、耕種農業は先に述べたコメ、トウモロコシ、サトウキビ、キャッサバなどは自家消費以上の生産をしており、外部販売が可能なようである。そのほかの野菜、果物などはほぼ自家消費で余ったものは近隣の村の市場で販売している模様である。これらがわずかな収入源となっている。

このようにこの地域の山岳少数民族の農業は基本的に「自給自足」形態をとっていると考えられる。家畜も自家消費が主体で、特に冠婚葬祭では



手造り独楽で遊ぶ



子供たちはとても明るい



少数民族のための中学校

重要な位置を占めているようである。ある農家で70～80kg近くの大きな在来豚を飼育しており、「これは販売しないのか？」と尋ねると「ばあちゃんの葬式のために残っていて、絶対に売らない」とのことであった。また、我々プロジェクトメンバーが農家訪問した時には20kgに満たない豚を突然屠殺して解体が始まった。どうした？と尋ねるとあなた方の昼食だとの回答。その日の昼食はプロジェクトメンバーだけでなく農家の親戚・家族も集まり大宴会となった。遠来からの来客をこのようなもてなし方で迎えることは最近の日本ではみられないことで心温まる思いがした。人数の少ないときには放し飼いの鶏をボーガンで仕留めて昼食にしてくれたこともあった。このようなもてなしはほとんどが自給の作物で賄っており現金を必要としていないようである。現金を必要としないというより非常に貧しくわずかの現金の蓄えすらないのが現実である。子供たちもナタで木を削って独楽を作って遊んでいる、おもちゃを手作りする姿は今の日本では見られなくなってしまった。「もっと大きくして食べればいいのに、もったいない」、と産業としての養豚を日本で見てきた筆者はつい、「枝重がいくらで、単価がいくらなので売ればかなりの額になるのに？」という計算をしてしまうこととは次元の違う感覚であることを思い知らされた。

ここの農家は3世代同居しており大家族である。兄弟・姉妹も同じ集落にすることがあるようである日、夕食に招待された農家では20人近くの親族が集まりとても楽しいひと時を過ごすことができた。ベトナムの国民の平均年齢は20歳代ということで非常に若く、子供たちも多い。高齢化と過疎化に悩む社会の日本に比べ若々しさと力強さを感じられる。このような山岳地帯の生活様式は近年に至る以前は数百年にわたって大きな変化はなく営まれてきたものと想像される。在来ブタも営々と種が保存されてきたものであろう。この奥地においてもハイブリットウモロコシの種子の広告を見かけることがあるが、農家は現金がないため買うことができず、在来種の種子を利用している。この点は種の保存や生物多様性、持続可能性の観点からはむしろ幸いしていると思われる。

日本でも昭和30～40年代には同じような様子が一般的であったように思われる。筆者は現在、宇都宮郊外の農村地帯に在住ですが、どこに行くにも車が必要になり、近所の農家の人に「車がなかったころ、買い物はどうしてた？」と聞くと「ほとんど買い物の必要はなかったよ」という答え。なんと、その当時、農家は数羽の鶏を飼育し卵や鶏肉をとり、自分たちが食べる野菜類を栽培していたとのこと。ベトナムと同様、少なくとも



も自家消費するコメや野菜類、鶏卵などは自給していたのである。このことはそのための現金も必要なかったということも言えよう。一方で、生産性は悪く、労働もきつかったかもしれないが、農業機械の借金はなく、農薬、化成肥料も使わず、従って現金も多くは必要なかった。その後、日本は工業製品を世界に輸出し、農産物を輸入する立派な工業先進国となった。その結果、日本の食料自給率は2018年には37%だという。農家ですら野菜をスーパーに買いに行くことになった。農家を継ぐよりサラリーマンの方がいいと跡継ぎにならず後継者はいない、耕作放棄地が増え、日本の農村は荒れ放題の状況にある。ベトナム奥地の農村の生活を垣間見た時、自給自足が農業の本来の姿で、このことによりその地域の文化がはぐくまれてきたように思われる。自給自足ができるならば飢え死にすることはない。現金収入はわずかではあるがベトナム奥地の農村生活をしている人々と、工業先進国といわれる日本の都会で高収入（ベトナムの奥地から見ると）を得ている非正規社員の若者ではどちらが幸せなのだろうか？昭和30年代の日本の若者（筆者自身）はパソコンも車もなく、テレビがやっと出てきた時代に幸せだったのだろうか？それから半世紀、その当時、ヒ

トは進歩するものと思ってきたが本当だろうか？

ベトナムの奥地では、現在、新たな時代に入ろうとしている。モーターバイクは一家に1台以上、テレビ、家庭冷蔵庫、携帯電話などが普及し、このためのガソリン、電気、こどもたちの教育費、病気をした時の蓄えとなる現金はどうしても必要となる。生産性が向上し現金収入が増えると更に稼ぎたくなるのが先進国が歩んできた道である。その結果、他の国を侵略し、貿易戦争が発生し、2%の富めるものと98%の貧しい人々に峻別されるようになった。ベトナムの山岳地帯でも同じ道を歩むのであろうか？地球上の陸地で都市部を除くほとんどのところでベトナムの奥地と同様、衣食住の多くの部分を自ら賄っており、それはその人たちがそこに定住して何千年、何百年と続けてきた営みである。過去100～200年の間に人類は大きな変化を遂げてきた。それは先進国といわれる国々が先導し、開発途上国とされる国々を先導している。果たしてそれが人類の幸せにつながるのだろうか？自給自足はエンゲル係数をゼロにする素晴らしい古代からの生活形態です。今一度過去の生活を思い起こして自らの手足を動かす、できることはやっていくことが人間の退化を止める唯一の方法と思われます。